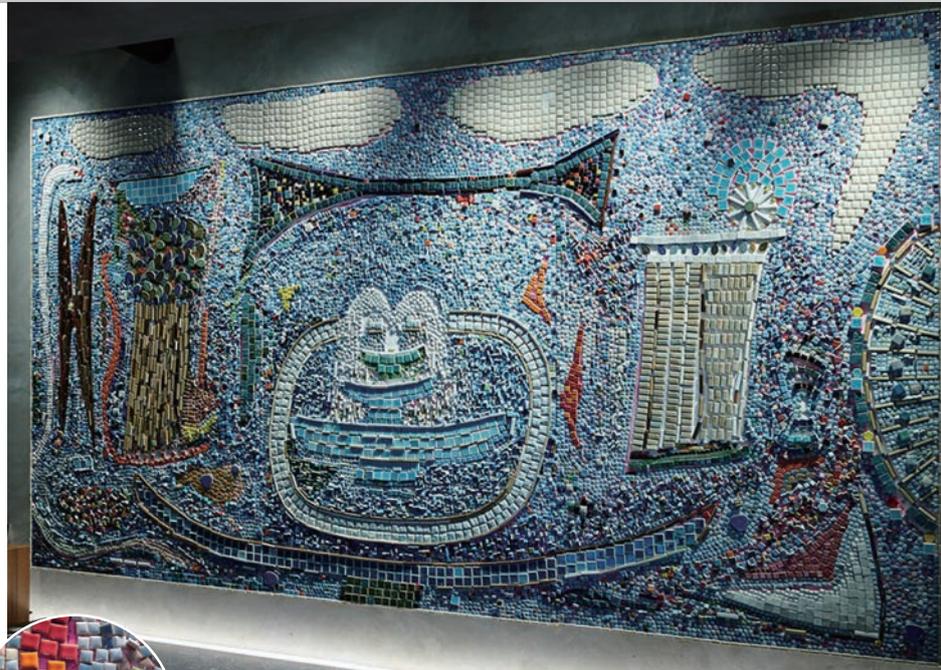


み の MINO EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

変わりゆく 名古屋を描いて ザタワーホテルナゴヤの モザイクタイル壁画



フロントで宿泊客を出迎えるモザイクタイル壁画「Fountain of Hope」。
サイズは約1500×2700ミリ。

2020年10月、名古屋テレビ塔に「THE TOWER HOTEL NAGOYA(ザ タワーホテル ナゴヤ)」がオープンした。アートをテーマとしたこのホテルにモザイクタイル壁画があると聞き、さっそく訪問。制作秘話もお聞きした。

「ザ タワーホテル ナゴヤ」のテーマは、「ART×CRAFT×LOCAL」。全15室ある客室、エントランス、ロビー、廊下といったホテル空間を地元縁のあるアーティストたちが演出。従来のホテルに留まらず、アートの発信地としての機能を併せもつ。

テレビ塔の正面入り口から裏手方向に向かい、鷲尾友公さんによるポップな壁画が目印となるエントランスからエレベーターで4階へ。フロントで宿泊客を出迎えるのが、杉戸洋さんにより制作されたモザイクタイル壁画だ。

「フロントはアート空間への入り口であり、お客様

自身も気持ちを切り替える場所です」と広報担当の伊藤有希子さん。そんな大切な役割を担うにふさわしく、壁画には照明が当てられ、無数のタイルが宝石のように輝く。抽象的だが何かしらのモチーフが描かれており、思わず見入ってしまう。

「これはテレビ塔から南側に見える風景なんです」。教えてくれたのは女将・豊田涼子さん。中央には久屋大通公園の噴水。その両脇には、三越名古屋栄店の屋上にあった観覧車や中日ビル^(*)など、街のかつてのシンボルが描かれている。「かつて」というのは、中日ビルは2019年3月に閉館、三越も再開発の予定があるからだ。「杉戸さんは、失われつつある風景を壁画に残したかったのだと思います」。

高校生のとき名古屋に暮らした杉戸さんは、インタビュー(ホテルのウェブサイトにて掲載)で名古屋の風景が変わっていくことへの寂しさを語るとともに、タイルを使った理由について言及している。

*1: 正式名称は中部日本ビルディング。跡地には2024年に超高層ビルが竣工、天井のモザイク画「夜空の饗宴」も移設される予定。



名古屋テレビ塔とは
完成は1954(昭和29)年。名古屋の戦後復興・都市計画の中、観光とテレビ放送用電波発信のために建設。設計は早稲田大学教授の内藤多仲氏(東京タワーを設計者)。2011年、電波塔としての役目を終了。名古屋のランドマーク的存在。国の登録有形文化財。

「中日ビルの天井画もそうですが、名古屋にテレビ塔が建てられた1950年代頃にモザイクタイルの壁画も多く作られています。それでホテルのフロントに飾る絵はモザイクタイルで作ることにしました」。

制作背景を知ると、壁画の風景が夢か幻のようにも見えてくる。一方、建物の解体とともに名古屋の街中から姿を消しつつあるモザイクタイル壁画が、新たに生まれたことに嬉しさを感じた。

自由に遊ぶタイルたち

制作にあたり、杉戸さんはタイルの産地である多治見市笠原町(岐阜県)を訪問。様々なタイルの中から、最終的に水色系の10ミリ角のタイルをメインに使うことに決めた。

小さなタイルを一枚一枚、手で張るのには大変な労力が要る。タイル関係者もその根気に脱帽したというが、いま壁画に近づいて細部を見ると、また驚いてしまう。

タイルが裏面を見せたり、立てるようにして張られていたり。タイルの上にタイルが重なっている部分もある。その立体感が美しい陰影をもたらしている。

こうした張り方は、多治見市モザイクタイルミュージアムで見たタイル張りの車^(*)からヒントを得たそうだ。制作過程の逸話から杉戸さんの熱意と遊び心が伝わってくるが、完成間際のこんなエピソードもある。「最後の仕上げは夜の遅い時間、ホテルで行なわれました。杉戸さんの提案により、その場にいたスタッフでいくつかタイルを張らせてもらいました。ちなみに私は『一個しかないからこれね』と、ゴールドのハート型のタイルを手渡されました」と豊田さんは微笑む。「杉戸さんの優しさを感じましたね」。作品を見る際は、ぜひハート型タイルを探してみてください。

1950年頃に作られたタイルも使用。背景には濃いめのピンク色の漆喰が塗られている。



立てたり、重ねられたりして張られたタイル。



中央に描かれた噴水の上部分。全体がカエルの顔にも見えてしまうのも愛嬌があって楽しい。

テレビ塔とともに

「見るほどよくなってきます。いくら見ても飽きないですね」と豊田さんが言えば、伊藤さんは「ずっと見ていたくなります。壁画に込められた様々な意味を知ってまた深みが増しました」と続けた。毎日のように壁画に接しているお二人のこんな言葉は、作品にとって最高の賛辞だろう。

取材の終わりに、「じつは作品は未完成」と明かされた。中央の噴水の空きスペースに張るものを探し中で、これをホテルのオーナーが張って完成なのどうか。また一つ新たな物語が加わる。

タイル一枚一枚に宿るたくさんの記憶や思い。50年を経て新しい生命を得たテレビ塔とともに、これからもずっと生き続けるだろう。

*2: 様々なタイルが全面に張られた車。2008年12月~09年3月に岐阜県現代陶芸美術館で開催された展覧会「タイル きのう・きょう・あした」にちなみ、来館者にタイルを自由に張ってもらったもの。



見学時はホテルのギャラリーで展覧会「Smokes in the clouds」を開催中。5名のアーティストの作品のラフスケッチを展示。杉戸さんのスケッチは子どもの絵のような自由さ。



使用したタイルは几帳面にリスト化されていた。

杉戸 洋

1970年、愛知県生まれ。愛知県立芸術大学美術学部日本画科卒業。現在、東京藝術大学美術学部絵画科油画准教授。1990年代の活動初期から国内外で活躍。2017年の個展「杉戸洋 とんぼ と のりしろ」(東京都美術館)では、タイルを用いた幅15メートルの大作《module》(2017)を発表。



THE TOWER HOTEL NAGOYAを紹介!

全15室あるホテルの客室には、名古屋に縁のあるアーティストの作品を展示。杉戸さんの絵画が飾られた部屋もあると聞き、案内していただいた。



杉戸さんの絵画作品が展示された部屋。



歓迎の意を込め、フルーツバスケットを描いた作品。窓から見えるセントラルパークの噴水「希望の泉」から想起。1950年代の雲田気を出すべく、額縁も当時の古いものを使用。



部屋からの、緑豊かなセントラルパークの眺望。モザイクタイル壁画はこの風景を描いている。

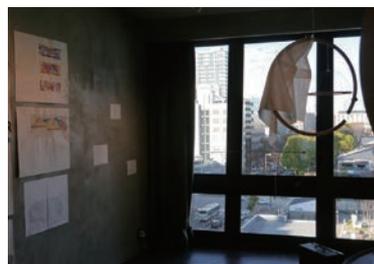


バスルームは全面モザイクタイル張り。黒目地で落ち着いた印象。



ロビーには森北伸さんによるテレビ塔をイメージした新作の立体作品を展示。右側に見えるのは塔の鉄骨。客室にも鉄骨があらわになっており、テレビ塔にいることを実感。

ギャラリーは1日1組限定で宿泊も可能。名称「on hold」は杉戸さんによる命名。



女将・豊田涼子さん。「空いていれば、好きなアーティストの部屋の希望も受けています」。



エントランスに描かれた、鷺尾友公さんの壁画作品「Shining - walking in circles around the core」。

愛知県のホテルとしては初めて、世界的なホテルブランドグループ『スモールラグジュアリーホテル (SLH)』に加盟。



THE TOWER HOTEL NAGOYA (ザ タワーホテル ナゴヤ)

愛知県名古屋市中区錦3-6-15
東山線・名城線 栄駅3番出口より徒歩5分
(セントラルパーク地下街内31番出口より直結)

*ギャラリー、レストランは宿泊者以外でも利用可。
現在ギャラリーは12:00~17:00までオープン
(見学の際は要予約)。

建材として、職業としての タイルの魅力伝えたい

原田左官工業所「タイルライブラリー」

左官とタイルの施工を手がけ、女性職人の活躍でも注目を集める原田左官工業所(東京都文京区)。昨年「タイルの魅力発信プロジェクト」を開始し、同12月に「TILE LIBRARY(タイルライブラリー)」をオープン。プロジェクトがめざすところについて伺った。

タイル業界への危機感

タイルライブラリーは、天然の玉石の洗い出しによる外壁で、大通りにあってひととき目をひく個性的な佇まい。「タイル」と名に掲げ、外壁が左官壁というのは、多治見市モザイクタイルミュージアムと通じるものがある。

運営する原田左官工業所は、60人の職人を擁し、店舗や住宅における左官とタイルの工事を手がける。タイルライブラリーに先駆け、2015年に左官の材料や技法を紹介する「SAKAN LIBRARY(サカンライブラリー)」をオープンしている。社長の原田宗亮さんは、左官業界の状況について話す。

「20年くらい前、左官業界は外壁のモルタル塗りや和室も少なくなり、仕事も職人も減っていきばかりでした。そうした中、業界のみんなの魅力でPRし、また珪藻土など新しい左官材が出てきて、少しずつ左官が見直されるようになりました。うちもサカンライブラリーをつくって仕事が増え、職人の採用も安定できています」

左官業界は復活を果たしたが、今度はタイルの仕事や職人が減っているという。

「インテリアに使う美しいタイルがたくさんあるのに知られていませんし、タイル張りの仕事も世間一般と接点がなく、めざす若者もない状況です。そこで建材と



右は左官壁をパネルにした左官パネル。中央の見切りはタイル。

して、職業としてのタイルの魅力をPRできないかと思ったのです」

そうして2020年7月に開始したのが「タイルの魅力発信プロジェクト」。その第一弾の取り組みとして、同12月にタイルライブラリーをオープンさせた。

セミオーダーできるタイルを中心に

入ってすぐの空間ではイタリア製のテラゾタイルを紹介。セラミックタイルは奥のスペースに展示している。共同運営する吉村秀樹さんは、展示のコンセプトについて話す。

「日本でタイルというと、水周りの白いタイルを思い浮かべる人が多いですが、アメリカなど海外では明るい色のタイルがインテリアに使われています。そんな使い方をお伝えできればと思います」。

タイルはセミオーダーできるものを中心に紹介。70色、20種の形状から選んで自分だけのタイルをつくることできる。

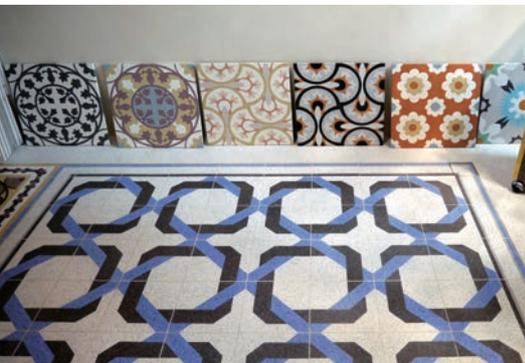
「タイルは多くの場合、既存のものから選びますが、左官は材料を厳選し調合するオーダーメイド。タイルでもこれができたらと考えました。フルオーダーには大量の注文が必要ですが、セミオーダーなら住宅のリビングの壁に使うくらいの量でも可能です」



70色、20種の形状から選んでセミオーダーできるタイル。



原田宗亮さん。



テラゾタイルは色を選んでセミオーダーが可能。汚れたら研ぎ直してきれいにする事ができる。



タイルと左官パネルを組み合わせて展示(右側)。左手前はテラゾタイルのカウンター。施工の様子は原田左官工業所ブログに綴られている。

「大量生産で安く」から、「多少高くても品質のよいものを」と考える人も増えつつあるいま、セミオーダーは魅力となりそう。一方でそれは職人にもよい作用があるという。

「お客様がタイルの色や形を選ぶ際、職人は過去の事例を紹介するなど、アドバイスができます。素材選びの段階からかわることで、タイルを張るときにもより気持ちを入れられます」(原田さん)。

そんな言葉の背景には、職人の仕事をめぐる状況の変化がある。以前は使うタイルを提案したり、美しい納まり方を考えたりするなど、クリエイティブな部分があったが、今は決められたものをきれいに納めるだけの仕事も多い。「もう一度、クリエイティブな仕事に戻したい」という思いが原田さんにある。

左官技術を組み合わせる

タイルライブラリーでは職人技も見所の一つ。テラゾタイルの床やカウンターでは、目地まで研ぎ出し表面をつるつるに仕上げる。左官パネルの見切りにタイルを使うといったアイデアも。左官の技術はタイルに応用することもできそう。

「両方とも湿式仕上げですし、鏝を使う作業なので親和性はあります。たとえば、れんがタイルを張った上に、その半分程度の面積に左官材を塗ったり、スクラッチタイルに「掻き落とし」(セメントモルタルを塗

て引っかき、ざらざらな模様を出す仕上げ)を組み合わせたり。素焼き調のタイルと土壁は相性がいいですね。うちは左官とタイルの両方を手がけているので、いろいろなことができると思います」と頼もしい返事。職人技でタイルの表現の幅も広がっていく。

最後にタイルの仕事の面白さについて伺った。「タイルの仕事は仕上げにかかわる仕事で、ときには建物のよしあしまで決める重要なもの。張り方や目地の入れ方ひとつで印象も変わります。建物や空間の表情を決めるという部分に面白さがあります」

原田左官工業所では職人として採用された際に本人がタイルか左官か、方向性を選ぶ。「タイルを選ぶ人も少なからずいる」というのは、そんな原田さんの思いが伝わったからかもしれない。

「タイルの魅力発信プロジェクト」では、今後も様々な取り組みを計画中。「タイル技能五輪に選手を出場させる」「タイルのパターン張りの魅力を動画で発信」「目地の色の詰め方による印象の変化を伝える」とアイデアは尽きることがない。「こつこつ伝え続けて、タイルの魅力がわかってくれる人が少しずつでも増えていけばと思っています」。



トイレの正面の壁は紙をクシャッとさせたような模様のタイル、床はセメント調のタイルを施工。



ライブラリー(図書館)と名付けたのは、タイルについて調べられる図書館のような空間にしたいという思いから。

TILE LIBRARY (タイルライブラリー)

東京都文京区千駄木4-17-3
オープン 10:00~17:00(月曜~金曜日)
※要予約(原田左官工業所ウェブサイトお問い合わせフォームより)

INAXライブミュージアム 「世界のタイル博物館」 リフレッシュオープン!



「タイル文化の交流」の展示。世界中に白地に青色をのせたタイルが多いという発見も。解説にはすべて英文を併記。



INAXライブミュージアム(愛知県常滑市)内の施設、「世界のタイル博物館」が二階の展示内容を大幅に改修し、昨年8月8日にリフレッシュオープン。新たな展示を増設するとともに、解説も充実させた。

「世界のタイル博物館」は、タイル研究家の山本正之氏の約6000点のコレクションを元に1997年に開館。紀元前から近代まで、世界中の貴重なタイルを展示している。今回の改修は、2007年に展示替えをして以来の大規模なもの。地域別の展示形態はそのままに、タイル文化をより詳しく知ることができるように、日・英文の解説やタイルが使われた様子のわかる写真を充実させた。

新設された「タイル文化の交流」の展示では、世界地図を用いてエジプトで生まれたタイルが二通りのルートで世界中に広まっていく様子を伝える。同じ展示空間では、産業革命以前の手作業による「タイルの加飾技法」を歴史順に解説。タイルの発展の歴史を理解することができる。

「タイルの裏側が語る」と題したユニークなコーナーも。普段は見ることないタイルの裏側がもつ様々な役割を明かされていて興味深い。

まずはタイルの美しさや造形をメインに楽しむのもよし、さらに歴史や文化についての知識を深めるのもよし。様々な楽しみ方ができる構成となっている。



多彩草花文レリーフタイル(日本、20世紀前期)
裏面が表面の凹凸の逆となっているのは、厚みを一定にし、焼成時の変形や歪みを少なくするため。

INAXライブミュージアム

敷地内には「世界のタイル博物館」のほか、「窯のある広場・資料館」「建築陶器のはじまり館」「土・どろんこ館」など6つの施設がある。3年の保全工事を経て2019年にリニューアルオープンした「窯のある広場・資料館」ではプロジェクションマッピングで「窯焼き」の臨場感を体感できる。

愛知県常滑市奥栄町1-130

開館時間

10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日

水曜日(祝日の場合は開館)、年末年始

ウェブサイト

<https://livingculture.lixil.com/ilm/>



山本氏のコレクションについて旅の写真とともに、紹介するコーナー。

勝手に選んだ

注目のタイル

～おもに新設展示より～



鉛釉ひまわり文レリーフタイル
(スペイン、20世紀前期)

アントニ・ガウディ設計の邸宅「エル・カプリチョ(奇想館)」の外装に使用。



素朴な可愛さ

褐色地多彩動物文瓦
(ドイツ、14世紀)

コレクションの数が少なく、一つの国としてまとめられなかった国々のタイルを集めたコーナーより。ドイツもその一つ。



褐色釉女神像
ストーブタイル
(ドイツ、17世紀)

ストーブタイルは室内に置かれたストーブの外側を覆うもの。正義の女神像が描かれており、裁判所などで使用されたと思われる。



施釉植物文タイル
(日本、20世紀)

小森忍と池田泰山が切り開いた新しい分野「美術タイル」のコーナーより。